

世界のジャガイモとサツマイモ

——FAOの統計を見て感じたこと——

社団法人 農林水産技術情報協会 坂 口 進

●はじめに

筆者は約20年前に、北海道農業試験場の島松試験地で6年間ジャガイモの育種に従事したことがあります。そのご縁で現役を退いた現在もイモとのお付き合いが続いており、時おり国際協力事業団筑波国際農業研修センターの野菜生産コースで、イモの講義を受け持つ機会があります。

大きな表題になっておりますが、小文はその講義内容の一部を書き直したもので、副題にあるように大部分はFAOの統計から引用した数字です。

開発途上国からの研修員を対象にした講義の内容がもとだねになっておりますので、本誌の読者諸氏にとっては、既によくご存知のことが多いとは思いますが、以上の事情をご了承ください。

ここでは約30年前と比較して、ジャガイモとサツマイモの生産がどう変化したかを統計の上から見ています。

(表1) 最近30年における世界のジャガイモおよびサツマイモ生産の変動

(1961-65の平均値を100として、1991の値を%で示す)

地 域	ジャガイモ			サツマイモ			人 口
	面積	単収	生産量	面積	単収	生産量	
世 界 全 体	75	124	92	72	163	117	171
ア ジ ア	116	156	181	65	180	117	181
ア フ リ カ	270	125	337	132	106	140	229
ヨ ー ロ ッ パ	49	127	62	64	104	64	115
オ セ ア ニ ア	94	192	182	694	48	343	161
北・中アメリカ	104	148	154	102	98	99	153
南アメリカ	93	176	158	57	108	61	192
旧 ソ 連	69	114	79	—	—	—	129
開発途上国全体	317	170	539	377	209	790	285
開 発 国 全 体	103	121	124	30	101	31	187

まず、世界全体・アジア・アフリカ・ヨーロッパ・オセアニア・北中アメリカ・南アメリカ・旧ソ連（扱った統計年次においてはまだソ連でしたが）、開発途上国全体および開発国（いわゆる先進国）全体のそれぞれについて、収穫面積・単収・生産量および人口について、1961年から65年までの平均値を100として1991年の数値（入手できた資料としてはこれが最新のものでしたので）がどうなっているかを表1に示しました。

また、それぞれの地域における産業としての規模、あるいは食生活への関与の程度をはかる目安として1991年の生産量の数字および人口一人当たりの量を表2に示しました。

●ジャガイモについて

表1で世界全体のところを見ると、面積がこの30年間に3/4ほどに減っていることがわかります。しかし単収が向上しているので生産量としては大差はありません。地域別では、

(表2) 1991年のジャガイモおよびサツマイモの生産量と一人当たりの値

地 域	ジャガイモ		サツマイモ	
	生産量 (万トン)	kg/人	生産量 (万トン)	kg/人
世 界 全 体	26116	48	12619	23
ア ジ ア	6911	22	11629	37
ア フ リ カ	681	10	647	10
ヨ ー ロ ッ パ	8505	169	10	0
オ セ ア ニ ア	147	54	57	21
北・中アメリカ	2314	53	130	3
南アメリカ	1108	37	146	5
旧 ソ 連	6450	222	0	0
開発途上国全体	8322	20	12404	30
開 発 国 全 体	17794	141	215	2

ヨーロッパ・旧ソ連を除く各地域において生産量が大きく増えています。その中でもアフリカとアジアでは面積・単収とも、したがって生産量も大きく増加していることが目立ちます。

アフリカにおける増加率はとくに顕著ですが、表2で見るとおり生産量としてはアフリカ全体でも日本のその2倍弱の数字ですから、産業の規模としてはまだ小さいものと言えます。

南アメリカとオセアニアでは、面積はあまり変化していませんが単収が大幅に増加していることが注目されます。もっとも、オセアニア全体での生産量は日本のその半分にもなりません。

いっぽう、一人当たり量が格段に大きくて食生活に密接に寄与していると思われるのにもかかわらず、減収が目立つのは旧ソ連とヨーロッパです。この数字は1991単年度が基礎になっているということもあって、旧ソ連は1990と91の両年に単収がとくに低く、またヨーロッパのほうは最近とくに面積の減少が著しいことが影響していると思われます。

開発途上国全体で見ると、人口一人当たりの量は多くはありませんが、この30年間に面積で3倍、生産量で5倍以上という大きな数字が目立ちます。しかし、ここでおことわりしておかなければならないのは、開発国と開発途上国との区分は当然のことながら一定不変のものではなく、統計の基礎が時代とともに変わっているということです。

したがって、ここでは細かい数字を論ずることは避けて、おおまかな傾向としてとらえるほかないでしょう。

■サツマイモについて

世界全体ではジャガイモと同じように面積がこの30年間に減っており、3/4以下となっていますが生産量はむしろ増えていることがわかります。

そして1991年の生産量のところでわかるように、サツマイモの産地はアジアに集中しており、世界全体の生産量の90%以上がアジアにおいて生産されています。

また、それはほとんど開発途上国に集中しています。

一人当たり量もアジアが最も多く、次いでオセアニア、アフリカとなります。

主産地であるアジアでは、この30年間に面積が2/3に減っていますが、単収向上がそれを補って余りあり生産量はむしろ増えています。その数字がそのまま世界全体の値に反映していることになります。

アフリカでは面積が増え、それにとまって生産量も増加しています。

オセアニアでは面積が7倍近くになっているのに生産量としては3倍強で、この数字を基礎にすれば不適地、あるいは充分な管理のゆきとどかない畑が増えているというようなことも考えられます。

ヨーロッパおよび南中北アメリカでは生産量は僅かです。開発国全体としてもこのことが言えます。

■ジャガイモとサツマイモの比較

表2によると、世界全体でジャガイモが一人当たり48kgであるのに比べてサツマイモは23kgですから、乱暴な表現をすれば食生活におけるウエイトは、後者は前者の半分ぐらいと言えるかも知れません。

ジャガイモとサツマイモとが作物として、それぞれ生育適地が違うことはあらためて言うまでもありません。

開発途上国の多くが熱帯に分布し、開発国の大部分が温帯にあることから、大ざっぱに言って温暖を好むサツマイモが前者に、冷涼とくに夜温の低いことを好むジャガイモが後者に適するということができるでしょう。

確かに開発途上国全体の生産量で見ると、サツマイモのほうがジャガイモよりはるかに多くなっています。

また、ヨーロッパや旧ソ連においてサツマイモの生産がほとんど無いことも理解できます。

それにしても、ジャガイモのほうはヨーロッパ・アジア・旧ソ連・北中アメリカ・南アメリカ・アフリカ・オセアニアの順に全世界に広く分布しているのに対して、サツマイモのほうは極端にアジアに偏在しています。

開発途上国と開発国とを比較すると、サツマイモの場合には世界全体の生産量のほとんどを開発途上国が占めており、また開発途上

国での30年間の増加率が高いということは理解しやすいのですが、ジャガイモの場合、生産環境としてかならずしも適地でもなさそうな開発途上国において、世界全体のほぼ1/3にあたる量が生産されており、しかも30年間の増加率も高いということに意外な感じを持たれる方も多いのではないのでしょうか。

◆年次ごとの生産量の推移

世界全体、開発途上国全体および開発国全体のジャガイモとサツマイモの生産量の変化を1961年から85年までグラフ化したものが、6年ほど前の国際ジャガイモセンターCIPの年報に載っていました。それをそのまま引用したのが図1および図2です。

実は最近の年次まで入れたものを描こうと試みたのですが、FAOの統計の上で開発国と開発途上国との分け方が80年代後半から変わっていることもあって、30年間をとおしたグラフがうまく描けなかったのがCIP年報のものを借らせていただきました。

このグラフの縦軸は1961年から63年の平均

値を100とした指数で示しています。

一見して、ジャガイモとサツマイモでは、生産量推移の様子がずいぶん違うことがわかります。

ジャガイモでは、開発国のほうはずっと横ばいか、やや低下気味の線なのに対して、開発途上国のほうは70年代から急な上昇カーブ

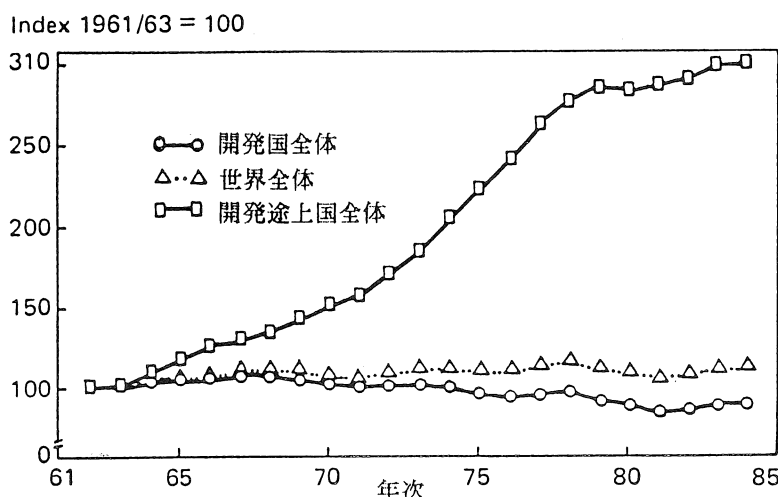


図1 ジャガイモ生産量の1961年から1985年までの推移
(国際ジャガイモセンターCIP年報、1986-87より)

Index 1961/63 = 100

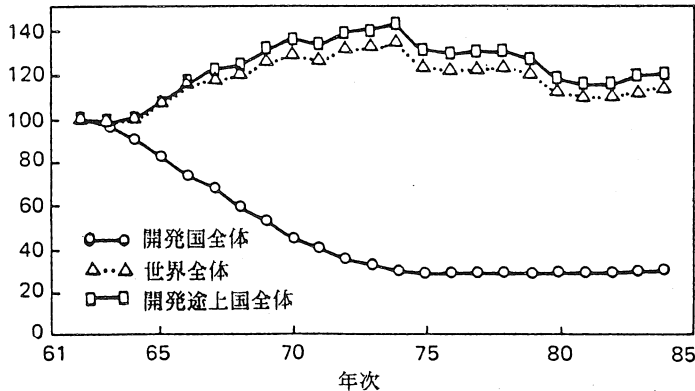


図2 サツマイモ生産量の1961年から1985年までの推移
(国際ジャガイモセンターCIP年報、1986-87より)

を描き、80年代に入るところから鈍化してはいますが依然として上昇の気配を見せています。

いっぽうサツマイモでは、開発国では70年代中ごろまで下降を続けてその後は横ばいです。これに対して開発途上国では70年代前半までは上昇していましたが、70年代後半は下降に転じ、その後細かい上下を繰り返しながらもほぼ横ばいに近いようです。

◆おわりに

イモ類は水分が多くいわゆる“なまもの”なので、穀物のように長距離輸送をすることが容易ではありません。

そのことから、開発途上国から開発国への輸出を目的とした生産があるとしてもその量は限られており、やはり食生活の変化により国内での消費が増加していることが、開発途上国における急激な生産増加の主因だと考えてよいでしょう。

タイの地方都市に国際協力事業団の仕事で居たことがありますが、僅か3年の間に各種の西洋野菜とともにりっぱなジャガイモが急に市場に出回るようになって驚いたことがあります。たまたまそのような時期に居合わせ

たということなのでしょうが、こうした国々でもジャガイモの消費が大衆化してきたという証拠だと思います。

もちろん、標高の高い畑に栽培したり、種イモの確保に苦心したりしているということでした。

サツマイモのほうは熱帯・亜熱帯の開発途上国では以前から普及していたでしょうが、数年

前にこんな見聞をしました。

ニュージーランドの先住民であるマオリ族の代表が日本に来て、ジーンバンクに保存してあった彼らの昔の品種を受け取って喜んで帰ったのです。そしてこのことは伝統文化を見直して民族のアイデンティティーを求める機運が盛んになったことの一つの現れだ、という説明を受けました。

オセアニアにおけるサツマイモ面積の異常なまでの増加には、そんな民族性への回帰の背景があるのかとも考えます。

いっぽう、熱帯諸国におけるサツマイモのように、種苗を自給自足して自家用菜園的に栽培している作物は、統計の中でどういうふうに扱われているのか心配なこともまた事実です。

以上、もっぱらFAOの統計を引用して論じました。よく言われることですが、数字を活かすも殺すのも、その裏にかくれたものを読みとる能力次第だということを改めて痛感します。

小文の中には、誤った解釈や引用があったのではないかと思います。読者諸賢からご教示ご叱正をいただければ幸いです。